

絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2010-夏

No.63

●表紙の画および題字は、
平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいたものです。



「家路」平山郁夫先生、院展初入選作 1953年



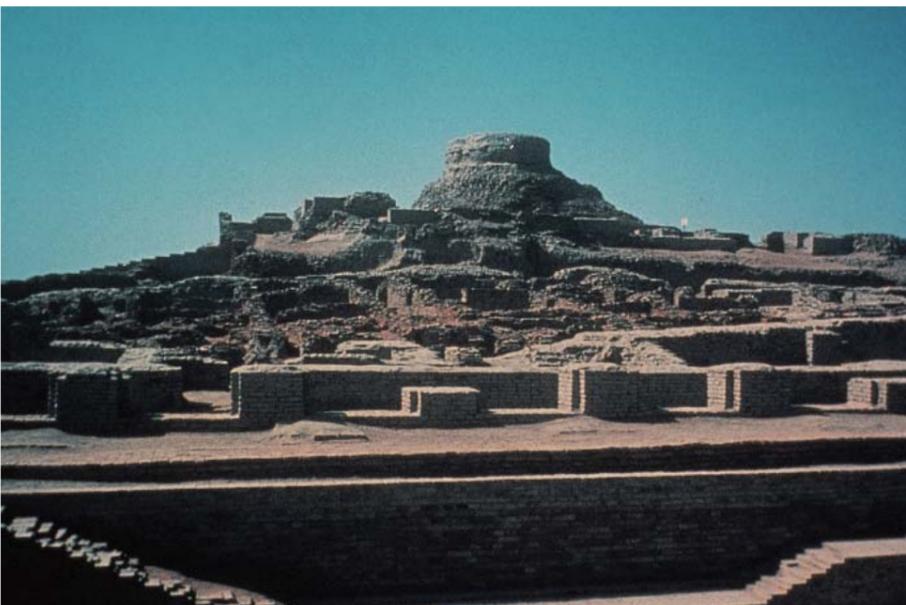
【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればとこの葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：
東京芸術大学 吉田左源二名誉教授

モヘンジョダロの遺跡群

(パキスタン・イスラム共和国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

モヘンジョダロの遺跡群は、パキスタン南部のインダス川下流域に位置し、紀元前二五〇〇年頃から紀元前一五〇〇年頃にかけて繁栄した、インダス文明の中でも最大規模の都市遺跡である。インダス川の洪水によって肥沃な土と水により発展した。西の城塞地区には穀物庫、大浴場、邸宅、学問所、集会所などの大建築物跡があり、東の市街地には整然としたレンガ造りの人家が立ち並んでいたとされている。

(一九八〇年に文化遺産として登録)

(社)日本ユネスコ協会連盟

新たな旅立ちに臨んで



理事長 野村 吉三郎

月並みの言葉ながら時の流れの早さは、いつも驚嘆を禁じえません。すでに本年も半ばとなりました。世の動きも誠に千変万化、政治も経済も人の心も何か見えないうちによって翻弄されているような気がします。

このような世情の中、かねてより懸案でありました当財団の公益財団法人への移行問題は、去る三月二十五日に内閣府より認定が下り、四月一日付けで公益財団法人としての設立登記を完了し、解決いたしました。

公益財団法人に移行したと申しましたが、仕事内容が劇的に変化するわけではありません。むしろ、従前にも増して与えられた任務を肅々とこなしていくことが求められています。とは言え、当財団は時代の要請に従って新しくスタートをしたわけですから、職員一同、緊張感をもって一層の努力を重ねていく所存です。

故・平山郁夫先生は、文化による社会貢献、文化による世界平和への貢献を主張されておりました。この主張は有名なユネス

コ憲章の前文に通じるものと思うのです。

前文には、こう記載されております。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」

そして、教育、文化の大切さを高らかに謳いあげています。まさに人は、パンのみにて生きるものにあらず、なのです。

私たちがこうした立場から、文化財の保存修復活動には大いに力をそそいでおります。周知の通り、文化財は人類が永年にわたって築いてきた知的活動の一端を具現化したものです。これはまた一朝にして出来たものではありません。文化財を守るということは、過去、現在、未来へとつながる知的、精神的リレーであると信じます。

また、芸術活動の支援にも力をそそいでまいります。活発な芸術活動の行きつくところは豊穡なる精神文化の結実です。

世の中を動かす様々な力を政治力、経済力、軍事力等々と分類することがありますが、その中において文化力というものを評価するならば、これこそ世界平和への実現

にむけての最先端の力ではないでしょうか。そうした未来志向の活動において、私どもの財団が少しでも役に立てれば……と思っております。以上の事柄は、すでに機会あるごとに繰り返してきた当財団の主張ではあります。新たな旅立ちに際し、改めて皆さまにお誓いする次第です。どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

*

昨年十二月二日に平山郁夫先生がお亡くなりになって、すでに半年の時がすぎました。去る二月二日の「お別れの会」には三〇〇〇名もの方々がお集まりくださいました。今夏はトルコのイスタンブールで、東京で、妙高でと、先生を追悼する展覧会が開催されます。こうした動きは来年へと続いていく予定とうかがっております。それにつけても私たちは偉大な指導者を失ってしまったことを改めて痛感する次第です。

本号では平山郁夫先生への追慕の意をこめて追悼特集を組ませていただきました。ここに先生の御霊に御礼を申しあげると共に御冥福を御祈念申し上げます。

お別れの会

去る二月二日に行われた亡き平山郁夫理事長の「お別れの会」の様態をご報告いたします。三〇〇〇名あまりの皆さまが御参列くださいました。ほんとうに有難いことで、心より御礼申しあげます。

清楚で厳かな雰囲気の中で

二〇一〇年二月二日。前夜より降り続いていた雪も上がり、初春の陽に残雪と空の青さが美しいコントラストを描いていました。昨年十二月二日にお亡くなりになった平山郁夫先生の「お別れの会」は、このような雰囲気の中、東京の芝公園にある「ザ・プリンスパークタワー東京」の「ボールルーム」で行われました。

式場正面に設けられた祭壇には、先生の作品を元



【お別れの会】の式場



宮田亮平先生



松尾敏男先生



松浦晃一郎先生

につくられた一双の屏風。シルクロードの地を二三〇回余も訪れた先生を象徴するように右にはシルクロードの昼が、左には夜の空がそれぞれ描かれています。御遺骨を囲む、百合や菊、カーネーション等の花々の色はすべて白。そして、天皇皇后両陛下、皇太子同妃両殿下、三笠宮崇仁親王殿下からの御供花。加うるに、国内外からその功績を称えられた証である文化勲章やレジオン・ドヌール勲章等も祭壇上に……。

微かに笑みをたたえ、慈愛にみちた目差しをむけられる先生の遺影。白と緑を基調とした祭壇の構成は厳かであり気品あふれるものでした。

午前十一時、東京芸術大学音楽学部の先生方が奏でる弦楽合奏、ハイドン作曲の「十字架の上のキリストの最後の七つの言葉」より「汝は今日、我と共に楽園にいる」が厳かに流れる中、司会の山根基世さんが式の開始を参列者の方々に宣言。

最初に一分間の黙祷を亡き平山先生に捧げました。そして、弔辞拝受。

最初に「お別れの会」委員長の松尾敏男日本美術院理事長より、芸術家としての平山先生の御功績が称えられ、日本美術院発展のために長年尽く



三笠宮殿下

「平山先生を語る言葉は汲めども尽きることはありません。本日、先生のお元氣な御写真の前でシルクロードにある様々な文化遺産の保存にむけての先生の御尽力に対し、あらためてお礼を申し上げる機会を与えられたことを光榮に存じます。先生の御冥福をお祈りして私の弔辞の結びとさせていただきます」これはユネスコの職員の方々が皆さま全員のお気持ちであると思います。

三人の先生方の弔辞のあと、平山先生が内外の各機関から顕賞された事績を山根さんが紹介。参列者一同、改めてその足跡の偉大さを感じた次第です。

この後、多くの弔電の中より鳩山由紀夫・内閣総理大臣、胡锦涛・中華人民共和国国家主席、ニール・マクレーガー大英博物館館長の三氏からのものが読み上げられました。

悲しみを乗り越えて

バッハ作曲の「G線上のアリア」が静かに式場内を流れる中、献花へ。この日、案内状を受けられ参列された方は三笠宮殿下、そして政・官・財・学界等々、日本の各界を代表する方々二三〇〇余名でした。

献花はまず、三笠宮殿下。そして「お別れの会」の代表者である松尾、宮田の両先生。つづいて平山美知子夫人はじめ御遺族の方々。皆さま手に白いカラーの花を持たれ、平山先生の御霊前に弔意を捧げられました。

このあと、係りの方々の案内で参列された皆さまは順次献花台へと進まれ、御遺族に挨拶され、お清めの会場へと移られました。

こうして午後一時十五分に「お別れの会」は予定どおり終了しました。そして式場内を整え直したのち、午後一時三〇分より一般の方々からの献花をいただきました。これには六三〇余名の方々から参列していただきました。午後三時無事終了。

三〇〇〇名の人々が「お別れの会」に参集してくださったわけですが、無事、肅静と終えることができた



献花する御遺族の方々

撮影・仙波志郎

【専務理事 小宮 浩】



サラエボ戦跡・ボスニア-ヘルツェゴビナ

1996年、サラエボを訪れる。廃墟と化した市内。戦闘の跡がなまなましく残るサラエボ芸術大学で学長、学生と交流。さらに多くの芸術家とも会い、励ます。帰国後、作品を通じて、同国の窮状を訴え、支援をよびかける。



ユネスコ親善大使勤続 20 年表彰

2009年5月14日 ユネスコ親善大使20年勤続で松浦晃一郎事務局長から表彰される。永年の文化財保護活動に対し、各国の親善大使からも称賛を受ける。しかし、この時がバリの「ユネスコ親善大使会議」への最後の参加となった。



大英博物館・イギリス

海外の博物館に所蔵されている日本をはじめとする東洋の重要な美術品の修復等の専門家の養成に積極的に協力を。また、多くの美術館にもそのために寄附をする。大英博物館にある東洋絵画修復施設は「平山修復室」とよばれ、1994年開所した。

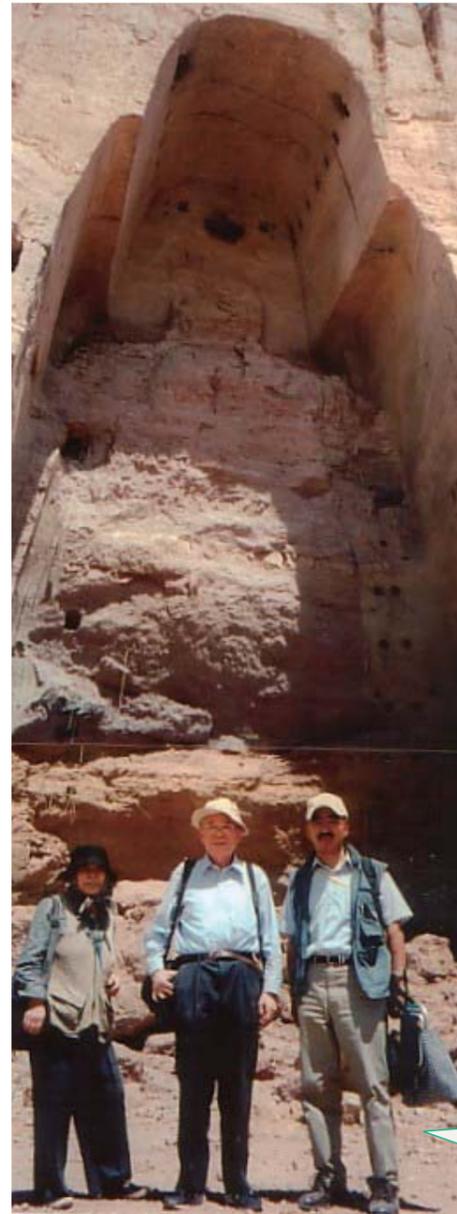
アンコール遺跡群・カンボジア

1991年、長い間、内戦が続いていたカンボジアを訪れる。アンコール遺跡群は同国が誇る文化遺産だが、内戦と自然災害による劣化が進んでいた。このため民間主導による「アンコール遺跡救済委員会」を発足させ、物心両面で支援。これは今もつづいている。



敦煌莫高窟・中国

1979年、初めて敦煌莫高窟を訪れる。仏教美術の宝庫として知られる世界的なこの遺跡は砂漠という厳しい自然環境の中にある。1988年、日中両国の政府を動かす。遺跡保存のための協力会議を開く。これを機に当財団の母体となった「文化財保護振興財団」が設立された。



南京城壁修復協力・中国

南京には日中戦争時代の恐ろしい問題が多々残っている。全長が21キロにも及ぶ明代に建造された城壁も戦争や災害による被害をうけていた。この城壁は中国国家文物局よりユネスコに提出されていた修復を要する文化遺産の一つであった。1995年に訪中し、修復事業に協力する。

バーミヤン渓谷・アフガニスタン

2001年3月、イスラム原理主義を唱えるタリバンは、国際世論の反対を押し切ってバーミヤン渓谷の二大仏像を破壊。ユネスコとも連係して救済を世界に訴え、タリバンに要請したが、徒労に終わった。その後、アフガニスタンの文化遺産を救うために流出文化財保護日本委員会を発足。同国の安定化の日を待つ。



高句麗古墳群・朝鮮民主主義人民共和国

貴重な壁画を残す高句麗古墳群をユネスコ世界遺産とするために機会あるごとに朝鮮民主主義人民共和国を訪問。申請書作成に助言を与え、古墳内を調査するために計測機器等もユネスコを通じて支給。2004年、こうした努力がみのり、古墳は同国初の世界遺産となる。

文化による社会貢献、文化による国際貢献を信条に「文化財赤十字構想」を提唱し、人類共通の宝である貴重な文化財を守るために世界を舞台に東奔西走、その範を自ら示されたありし日の平山先生の御姿を回顧いたします。

「文化財赤十字活動の足跡を辿る」

シルクロード 米国に至る

テンプル大学日本講師 阿南ウァージニア史代

一般に、シルクロードは、ローマから西安として日本にまで達したと言われているが、平山先生がシルクロードをさらに東の方に米国カリフォルニア州中部のハンフォードという田舎町にまで延ばし、永遠の主題である平和を、米国の人々の心に伝えた事蹟は余り知られていない。二〇〇七年当時、米国はシルクロード文化の中心であったアフガニスタンとイラクにおいて戦闘を行っていた。ハンフォードでの「平山都夫絵画展」は牧場と桃の果樹園の中にある小さな日本美術館で開催されたのだが、たまたま、私の娘がコーディネートとしてお手伝いしていた関係で、私達夫婦は平山ファミリーと共に、先生の米国における最初で最後の絵画展の開幕式に参加する機会を得た。平山先生ご自身は、直前に出席を見合わせざるを得なくなったが、先生の精神は間違いなく私達と共に会場にあった。

輝くばかりの色彩が際立つ出品作の中には、中東を題材にしたものが多く、米国の老婦人達が、コバルトブルーを基調とした「ペルセポリスの月」の前に立ちつくして見入っていたのが印象的であった。展示された作品群を通して、「われわれはこの地域の伝統を理解し守ることによってこそ平和を築くことができる」という平山先生のメッセージが、明確に観者の心に訴えかけていた。

平山都夫先生の思い出

壇国大学教授 特任教授 (前) 韓日文化交流会議韓国側委員長 金 容雲

先生に初めてお会いした時、朝鮮民主主義人民共和国の高句麗古墳壁画をユネスコ文化遺産に登録することは、朝鮮半島休戦ラインに平和の風穴を空けることになると話しておられました。二〇〇四年、その努力の成果が実るやいなや、高句麗古墳の傍に研究所を設け、そこに全世界の学者を集めて、高句麗壁画に関する学術会議を開く事を次の目標にしておられました。私は、平素、先生のお言葉の節々から、被爆体験が平和への思いをいっそう強くしたものとお見受けしていました。

今の私の最大の願いは、近い将来、先生の名を掲げつつ、それを実現することです。いつか、私が鎌倉の紫陽花が見たいと言った事を先生は憶えておられ、時季外れだがとおっしゃいながらも快く韓国側文化交流会議のメンバーを奥様、お孫さん、御家族ぐるみで案内してくださいました。

私たちの乗ったバスが海辺を通る時、七里ヶ浜はどこか気になりました。先生は「ここですよ」と窓の外を指差しながら小さな声で「…七里ヶ浜の磯伝い、稲村ヶ崎、名將の剣投ぜし古戦場…」

を歌っておられるのです。小学校時代の唱歌を思い出されたのでしょうか。はからずも、その時の私の思いと同じだったのです。今も、独りで、その歌を口ずさんでいると、自然に目が潤んできます。

研究会

日本美術院・特待 清水 操

毎年六月には秋の院展の準備に入るが、もう平山先生のご指導を仰ぐことができないことに大変な寂しさを感じる。初めて先生の研究会に参加した時は、まだ「上野の社会」という名前もない10人ほどの会だった。その時の先生のお言葉で覚えているのは「他の人の絵をよく見ること。それが一番の勉強」先生のご指導は研究会の若い熱気を引き出し、時に厳しい言葉もあったが、優しさに溢れていた。その後、周囲の励ましに後押しされて出品を続けたが、ある年、家族の入院などで秋の院展の制作を断念した。

休まずに出品を続けることくらいしか扱りのなかった私は自分がなさけなくて仕方がなかった。研究会では、全員の指導が終わるといつも先生からのちょっとしたお話があり、もうこれが最後だと思っ

て行った翌年の秋の研究会では、こんな話だった。「たとえば女の人は結婚してしばらくすると育児やいろいろな事情で絵が描けない事があるが、再び描きはじめると、見違えるような良い絵を描くことがある。それは描けない間に何かを一所懸命に尽くした結果、人間性が磨かれ、それが絵に表れるからだろう。人生の中でどんなに頑張っても筆を握れない時は必ずある。決して諦めてはいけない。どんなことでも絵を描く上で必ず役に立つから、信じて頑張りなさい」知らずに涙が出た。

諦めてはいけない。より良い絵を描くために生き、より良く生きるために絵を描く。研究会で平山先生から教えていただいた。

忘れられない出会い

フランス国立ギメ東洋美術館館長 ジャック・ジエス

平山先生に最初にお会いしたのは、一九八三年の敦煌におけるシンポジウムで私がスピーカーとして参加した時です。そのシンポジウムが終わった後、石窟を訪問したところ、先生は壁画の模写をしておられました。そこで、本当に静かで落ち着いた平山都夫先生の素晴らしい人柄に触れることができたのです。平山先生は、一九六三年にユネスコの奨学生として初めてフランスを訪問され、以来、ギメ美術館との交流が続ききました。

東京でギメ美術館の展覧会を開催した折り、当時のジャリージュ館長が先生の鎌倉のアトリエを訪れ、当館での先生の展覧会を提案し一九九一年に「平山都夫シルクロード展」が開催されましたが、それに合わせて大変かけがえのない方でありました。平和世界の実現というものが常に先生の精神の中にあり、寛大な心、相互理解の重要性をいつも説いておられました。

ギメ美術館は東洋美術を中心とした欧州での代表的な美術館ではありますが、はたして私どもの仕事に平山先生の期待に応えているのかどうか、常に自問しながら運営を進めております。先生の御冥福をお祈りいたします。

平山都夫先生を思う

中国日本友好協会副会長 井 頓泉

平山都夫先生のご逝去から早くも五ヶ月経ちましたが、いまだに目の前に先生のすがすがしい笑顔が浮かび、優しい声が聞こえてくるような気がします。

世界に名を馳せる画壇の巨匠、尊敬される平和友好の使者である平山先生は、私にとって人生の恩師であり、忘年の友でもありました。先生と初めて知り合ったのは一九八六年のことでした。大学を出て中日友好協会に入ったばかりの私の最初の仕事は平山先生ご夫妻にお伴して、敦煌、新疆ウイグル自治区を訪問することでした。その「西域の旅」は私にとって、中日友好への道のりの第一歩であり、一生を費やしても使いきれない財産となりました。

一九八八年、先生が私財を投じて創設した「平山奨学金」の支援を受け、私は慶応大学で学びました。その一年間、先生は親代わりのように面倒を見ていただき、お正月の時には「勉強も生活もしっかりしてね」とお年玉さぐくださったことは、まるで昨日のことのように鮮明に私の記憶に残っております。

中日友好協会での二十数年間、平山先生から多くのことを学びました。先生の高潔な人格、平和への熱意と中日友好に対する執念と努力は、先生との出会いを得た人々に感銘を与え、彼らの尊敬を博しました。平山先生は永遠の眠りにつかれましたが、その精神は平和を愛する人々の中に生き続けることでしょう。今後も先生の教えを忘れることなく、中日友好事業のために頑張っていきたいと存じます。

双方向の文化交流

東京芸術大学・教授 宮廻 正明

平山先生は偉大な作家であるとともに、優れた教育者でもありました。いかに生きるかという先生の姿勢そのものが芸術であり教育でした。

西から東へ、シルクロード文化の伝播の実証を試み、自ら足を運ばれシルクロード各地に染みこんだ文化を掘り起こし、一筆、一筆に刻みこんでこられました。隣村から隣村へ、カレズ(坎儿井)のように文化が伝播し、ついに西から東へ文化が到達するさまを見事に実証されたのです。そして先生は「文化財赤十字構想」を掲げられ、西から伝わり日本で成熟した文化財、日本だけに残された古典技法や修復技術と科学的な分析力を、東から西へ返していく「双方向の文化交流」を提唱されました。

「西と東」「創作と保存」という双方向の文化のエネルギーこそが、新たな芸術の発展につながる日本の役割ではないかと考えられていました。そして先生は日本を世界へ発信する使命を、われわれに残していかれたのです。

今夏、トルコで平山都夫展が開催されます。先生は今も「世界へ」を實踐されています。また今年4月から東京芸術大学の文化財保存学の中に「平山都夫記念文化財赤十字構想室」が誕生し、世界の文化を受け入れ発信させ、世界へ向けて発信していく基盤が出来ました。先生のご遺志を引き継ぎ、日本に蓄積された優れた文化力を世界に発信していきたいと思えます。



昭和60年法隆寺金堂調査

広がりを見せる「文化財赤十字」活動

ます。そのような問題に対処するために、当財団が、日本サムスン社と韓国サムスングループの支援を受けて、文化財保存修復の中国国内の専門家育成プログラムを立ち上げ、中国国家文物局と連携し、文物研究所文物保護修復トレーニングセンター及び東京文化財研究所等の先生方の指導による研修を実施。シルクロード沿線の六つの省と自治区（陝西・河南・甘粛・新疆ウイグル・青海・寧夏）の博物館等に勤務している若手研究者を二〇〇六年から五年間で一〇〇人程度養成しようというものです。研修は、

- 1) 土遺跡保護専攻（土構造物の観測方法、修復技術）
- 2) 博物館文化財専攻（博物館館蔵品の修復）
- 3) 考古発掘専攻（発掘現場の管理、出土遺物の保護）
- 4) 古建築保護専攻（木造建造物の分析、修復技術）

の4コースがあり、それぞれの理論、実験と現場実習を行い、更に、日の中堅専門家が技術と知識の交流を図りながら、有



シルクロードを行くキャラバン（東・太陽）

カレンダーの表紙は「大シルクロード・シリーズ」が使用される。2006~2007年版は「シルクロードを行くキャラバン」



シルクロードを行くキャラバン（西・月）

効な教育プログラムの作成を行っています。そして、このプログラムのために、日本サムスン社は平山先生の絵画を使用したシルクロードを旅するカレンダーを毎年作成し、このプログラムに賛同し、寄付を行っていただいた方々に贈呈しています。このシルクロードを描く平山先生の作品は、西方の文化が東方へと伝播した終着地であるいにしへの奈良の都の場面から始まり、朝鮮半島、中国へと渡り、六年をかけて、徐々に西へと進みます。来年のカレンダーはその最終年に当たります。パミール高原、ガンダーラやバミヤンの遺跡を経て小アジアそしてシルクロードの西の終着点イタリアのローマで完結します。その成果をまとめた本が、今秋に完成する予定です。詳細については、次号にてお知らせいたしますが、このプログラムを立ち上げていただいた日本サムスン社に感謝するとともに、平山先生亡き後も、このような「文化財赤十字」活動の輪が更にいっそう広がりを見せることを願っております。



2005年6月「サムスン・シルクロード文化財保護フェローシップ」調印式

当財団は、故平山郁夫理事長が唱道した「文化財赤十字」活動支援の中心的役割を果たしてきました。すなわち、

- ① 日本国内の文化財の修復保存
- ② 日本国外の美術館や博物館が所蔵する我が国の文化財の修復保存
- ③ シルクロードを中心としたアジアの文化遺産の修復保存
- ④ それらの修復保存の技術者を育成するための助成支援

が活動の柱となっております。これらの中には、京都の尼門跡寺院所蔵の貴重な文化財の修復や紛争が続いているアフガニスタンのバミヤン遺跡の壁画や塑像等流出文化財の日本国内での保護および修復支援活動等もあります。このような活動は、日本で事業を展開している外資系の企業にも注目されるようになりました。その成果の一つである「サムスン・シルクロード文化財保護フェローシップ」が、日本サムスン社の支援で

二〇〇五年六月から始まり、今年が早くも最終年となります。このプログラムがスタートしたのは中国の敦煌やカンボジアのアンコール遺跡の修復保存、朝鮮民主主義人民共和国と中国に存在する高句麗古墳の世界遺産登録等に尽された平山先生の「文化財赤十字」活動、すなわち「人類共通の遺産であるシルクロードの文化財は、国境を越えて人類全体が守り続けなければならない」との考えに共鳴した同社が、日韓の文化の共通の源でもある中国の貴重な文化財を修復保存し、日韓中の次の世代に引き継ぎ、三カ国の文化の懸け橋となつて貢献しようとの申し出があったことがきっかけでした。中国のシルクロード沿線に点在する文化遺産とそこに存在する文化財の数は膨大であり、一方で文化財保存修復に従事する専門家の数は不足しており、多くの文化財が修復されない状態で危機に瀕してい

日本国政府アンコール遺跡救済チーム報告42

佐藤 桂 (さとう かつら)



コーケルを代表する未完のピラミッド型寺院「ブラン」

はじめて訪れたカンボジアの印象が忘れられず、フランスに留学していた間も、いつかはカンボジアのために、という思いをいつも抱いていました。その思いを果たすべく、二〇〇四年に博士課程に入学したとき、恩師である中川武先生にひとこと「コーケルを調べてみたら？」と言われたことを、今でもよく覚えています。コーケルとは、アンコールから北東約九十キロメートルに位置する十世紀前半の都市址であり、一人の王の手によって造営された後、二十余年で放棄された「短命な王都」として知られています。観光開発の進むアンコー

さに心躍る思いで飛びついたことを思い出します。難解なフランス語と格闘しながら、いまだ見ぬ遺跡との対面を夢見ていた時間が長かっただけに、コーケル訪問はそれだけで特別な出来事でしたが、このときは結局、前夜の大雨でぬかるんだ悪路に阻まれ、遺跡群の手前約一キロメートルでやむなく下車した私たちは、かろうじて最南端の寺院だけを徒歩で見学したのでした。それでも、観光客にあふれるアンコール・ワットの熱気とは異なり、静かな森におおわれた遺跡群は十分に魅力的で、必ず再訪することを誓って、短い滞在を心に焼きつけたことを覚えていきます。

いまでは観光バスで団体旅行客が乗り入れ、メインの遺跡であるปราสาท・トムの前にはレストランと土産物屋が並ぶ場所となりましたが、このあとに私たちが最初の悉皆調査を行った二〇〇五年四月にも、まだ何もないう状態でしたので、電気も水道もない近隣の村の宿泊所に寝泊まりし、明るいうちにはとにかく遺跡をめぐり、夕暮れで視界が遮られると村へ帰って、大きな水瓶に入った水で顔を洗い、星空を見上げる日々を過ごしました。こんな体験がきつと、私のコーケルへの言葉にできない思いにつながっているのですが、便利ではない、容易ではない、といったところが、その失われて欲しくない魅力の一つであるようにも思います。

世界遺産として知られるアンコール遺跡だけでなく、カンボジアにはコーケルを含め、数多くの魅力的な遺跡が存在することを、多くの人に知ってもらえれば、と思います。コーケルは比較的小さな都市址ですが、古い形式を残す小規模な寺院が並ぶ一方で、建造を急いだためと思われるラテライト(紅土岩)の塔群や、巨大な砂岩を用いた未完成の寺院が散見され、王都実現



スラヤン村の宿にて 朝の風景

まいったものが、どれだけあったかを知るほどに、その荒れ果てた現状を哀しく思うのです。長年放置されている地方遺跡は、多かれ少なかれ同じ状況下に置かれており、心ない破壊や略奪の対象となつていくことに対して、早急な対策が必要とされています。のみならず、昨年、世界遺産に登録されたことで、タイとカンボジアの紛争の引き金となったプレア・ヴィヘアのように、文化遺産をめぐる問題は常に負の方向へ発展する危険性を孕んでいることには、十分に慎重にならなければなりません。アンコールを中心として、地方遺跡を含むクメール全体の包括的な保存と活用の問題解決に向け、コーケルの調査研究を通して、少しでも貢献できればと思っています。

著者略歴

1972年 富山生まれ
1995年 早稲田大学 理工学部建築学科卒業
1997年 早稲田大学 大学院理工学研究科修士課程修了、海外コンサル企業勤務、フランス留学、翻訳業を経て
2004年 早稲田大学大学院理工学研究科博士課程入学
2007年より現在 早稲田大学理工学研究科客員研究員



公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の発足

当財団は、新しい公益法人法のもとに申請を行い、平成二十二年三月二十五日に内閣総理大臣から公益財団法人の認定を受け、四月一日に公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の設立登記を行いました。
新法人の発足に伴ない財団の重要事項の決定と理事の業務執行の監督機関となる評議員会の委員(評議員)及び理事、監事に左記の皆様にご就任いただきました。

名誉顧問 (一名)

氏名 三笠宮崇仁殿下

顧問 (二名)

氏名 俵谷 利幸
玉井 賢二

評議員 (二十二名)

氏名 現職名
飯田 亮 セコム(株) 最高顧問
浦井 正明 寛永寺 長老

奥島 孝康 早稲田大学 学事顧問

小野 直路 (株)NHKエンタープライズ 代表取締役社長

小林 一朗 (株)東京読売サービス 人材本部長

是枝 伸彦 (株)ミロク情報サービス 会長

西園寺裕夫 (財)五井平和財団 理事長

佐藤 一郎 東京芸術大学 教授

白井 勝也 (株)小学館 代表取締役副社長

澄川 喜一 彫刻家 横浜市芸術文化振興財団 理事長

田淵 俊夫 日本画家 日本美術院 理事

堤 清二 (財)セゾン文化財団 理事長

中澤 一雄 (株)高島屋 美術部長

永岡 公 (株)精養軒 相談役

野間佐和子 (株)講談社 代表取締役社長

箱島 信一 (株)朝日新聞社 特別顧問

英 正道 鹿島建設(株) 顧問

原 嘉男 (財)鹿島美術財団 理事

松村 茂 (株)三越 執行役員美術部長

真室 佳武 東京都美術館 館長

水野敬三郎 東京芸術大学 名誉教授

渡邊 明義 世界紙文化遺産支援財団 紙守 代表理事

理事 (九名)

氏名 現職名
野村吉三郎 全日本空輸(株) 最高顧問
栗山 尚一 アジア調査会 会長

小宮 浩 (財)文化財保護・芸術研究助成財団 専務理事

滝 久雄 (株)NKB 代表取締役社長

田邊三郎助 町田市立博物館 館長

成田 豊 (株)電通 最高顧問

野口 昇 (社)日本ユネスコ協会連盟 理事長

林 有厚 (株)東京ドーム 代表取締役会長

宮田 亮平 東京芸術大学 学長

監事 (二名)

氏名 現職名
布施 謙吉 弁護士
西巻 茂 税理士

二〇一〇年六月現在
敬称略/五〇音順

■文化財保存修復助成事業

*美術工芸品の保存修復に対する助成

- ①神奈川県・中沼自治会 薬師如来坐像の保存修理
②滋賀県・常善寺 板絵着色二十五菩薩来迎図一面の修理
③京都府・六道珍皇寺 紙本着色珍皇寺参詣曼陀羅の保存修理
④兵庫県・温泉寺 木造四天王立像の保存修理
⑤奈良県・長谷本寺 木造十一面観音立像の保存修理
⑥高知県・要法寺 絹本着色慈山院画像の保存修理
⑦熊本県・荒茂毘沙門堂管理組合 木造金剛力士卍形の保存修理
⑧富山県・八尾町東町曳山保存会 八尾町祭礼曳山の保存修理

*建造物の保存修復に対する助成

- ①山形県・天満神社 天満神社本殿・拜殿の保存修理
②栃木県・大雄寺 大雄寺の保存修理
③埼玉県・山下いね 山下家住宅(内蔵)の保存修理
④千葉県・龍正院 龍正院本堂の保存修理
⑤長野県・土屋省吾 旧芦田宿本陣土屋家住宅の保存修理
⑥岐阜県・横蔵寺 横蔵寺本殿の保存修理
⑦静岡県・龍潭寺 龍潭寺の保存修理
⑧愛知県・大樹寺 大樹寺伽藍の保存修理
⑨大阪府・春日神社 春日神社本殿の保存修理
⑩鳥取県・三佛寺 三仏寺建造物群の修理
*新潟中越沖地震・能登半島地震の被災文化財の復興支援

①新潟県・大泉寺 大泉寺仁王門の保存修理

②石川県・来迎寺 来迎寺如来坐像の保存修理

■芸術研究等助成事業

①「国宝源氏物語絵巻現状模写研究」(東京芸術大学美術学部教授 手塚雄二)

②縄文時代晩期の環状木柱列の同時代仕様

による復原とその研究

(能登町真脇遺蹟縄文館長 高田秀樹)

③鎌倉時代青蓮寺木造愛染明王坐像と五島美術館愛染明王坐像の比較研究 (大正大学文学部歴史文化化学科教授 美術館愛染明王坐像の比較研究 高田秀樹)

④「日本及び東洋絵画の保存修復研究」(東京芸術大学大学院文化財保存学助教 副島弘道)

⑤「文化財保存修復専門養成実践セミナー」(NPO法人文化財保存支援機構 副理事長 西浦忠輝)

⑥「東京芸術大学シンフォニーオーケストラドイツ公演」(東京芸術大学音楽学部長 植田克己)

⑦「世界平和の構築を目指す世界遺産文化の道」国際交流シンポジウム(日本イコモス国内委員会委員長 狩俣公介)

⑧「日韓国立映画教育機関による長編映画共同制作」(東京芸術大学映像研究科教授 前野まこと)

⑨「オーケストラプロジェクト2009」オーケストラパフォーマンスの現在(実行委員会委員長 中川俊郎)

⑩「日本フインランド 木造建造物の修復セミナー」(筑波大学大学院人間総合科学研究科 准教授黒田乃生)

⑪「藝大アーツイン丸の内」(東京芸術大学長 宮田亮平)

⑫「ICOMOS民家学術委員会」2009年次ルーマニア会議」出席(日本イコモス国内委員会委員長 前野まこと)

■国際協力事業

*敦煌研究院関係助成

①一九九八年十二月十日付で合意された、人材育成等の援助計画に関する覚書に基づき、敦煌研究院より研究員2名の招致助成 (張 小剛/李 燕飛)

②敦煌研究院文化遺産データベース構築日

共同事業

(東京文化財研究所保存計画研究室長 岡田 健)

*アンコール遺跡保存修復事業に関する助成

①プレ・アンコール、サンボ・プレイ・クック遺跡群の保存修復事業 (日本国政府アンコール遺跡救済チーム)

*在外日本古美術品保存修復協力事業に関する助成 (JSA)団長 中川武)

①「三國G」日韓中東洋画一アジアを越える伝統へ (東京芸術大学美術学部長 齋藤典彦)

*日中韓文化交流フォーラム関連事業の助成

①「ウズベキスタン共和国における文化遺産の調査と保全」人材育成と技術移転(駒澤大学文学部講師 古在浩明)

②「トルコ共和国カマン・カレホック遺蹟出土遺物、建築遺構保存」(中近東文化センター)

③「モンゴル国ヘンティ県所在碑文・岩画遺蹟の記録作成プロジェクト」(新潟大学超域研究機構教授 白石典之)

④「シリア国立タマスカス博物館における常設展示設置」(東京大学総合研究博物館教授 西秋良宏)

■重点助成事業

*尼門跡寺院文化財保存修復助成事業

①靈鑑寺所蔵 絹本着色「普賢院宮御壽像」一幅の保存修理

②光雲寺所蔵 木造東福門院像の保存修理

*シルクロード文化財保護フェローシップ事業

①シルクロード文化財保護フェローシップ助成事業 (中国国家文物局)

②シルクロード文化財保護フェローシップ協力事業 (東京文化財研究所)

*アフガニスタン文化財復興支援事業

①アフガニスタン流出文化財壁画画片の保存修復

(東京芸術大学大学院文化財保存学保存 教授 木島隆康)

■文化財の保護及び芸術振興に関する出版物の刊行、講演会の開催、その他普及広報活動に関連した事業を行った。

*広報紙「絲綢之路」の発行

第60号(2009夏)平成21年6月15日発行

第61号(2009秋)平成21年10月15日発行

第62号(2010春)平成22年2月28日発行

発行部数:各2,000部

配布先:全国教育委員会、美術館、文化財研究機関、芸術系大学、新聞社、寄附者、賛助会員、理事・評議員、その他関係者

*在外日本古美術品保存修復カレンダー基金の募金活動 (募金額9,414,465円)

募集期間:平成21年11月~平成22年1月

制作題材:ローマ国立東洋美術館所蔵「虫歌合絵巻」

募金応募件数:2,857口

制作協力:東京文化財研究所

*日中韓文化交流フォーラム中国揚州会議の開催

会期:平成21年10月14日~17日

会場:中華人民共和国揚州市

*「妙高夏の芸術学校」の開催

主催:妙高市、新潟県

共催:勸学社、芸術研究助成財団、新潟日報社

期間:平成21年7月30日~8月2日

*第4回「文化財保存・修復」読売あをによし賞」を後援

*「尼門跡寺院の世界」皇女たちの信仰と御所文化」展を後援

主催:中世日本研究所、東京芸術大学、産経新聞社

*「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を後援

*「文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム」

の新たな展開」を後援

*「美の継承展」を後援

*「文化人・芸能人の多才な美術展」を後援

二十一年度ご支援いただきました法人賛助会員の皆様

法人正会員 (四十三社)

(五十音順)

- アイテック 株式会社
朝日生命保険 相互会社
アサヒビール 株式会社
出光興産 株式会社
株式会社 NHKエンタープライズ
株式会社 NKB
鹿島建設 株式会社
賀茂鶴酒造 株式会社
関西電力 株式会社
キリンホールディングス 株式会社
株式会社 講談社
株式会社 鴻池組
株式会社 資生堂
株式会社 集英社
株式会社 精養軒
セコム 株式会社
全日本空輸 株式会社
株式会社 高島屋
武田薬品工業 株式会社
株式会社 竹中工務店
株式会社 テレビ東京
株式会社 電通
東京ガス 株式会社
東京書籍 株式会社
東京電力 株式会社
株式会社 東京ドーム

株式会社 東京マルイ美術
トヨタ自動車 株式会社
錦プロデューサーズ 株式会社
日本写真印刷 株式会社
日本たばこ産業 株式会社
株式会社 日本放送出版協会
野村ホールディングス 株式会社
株式会社 日立製作所
有限会社 丸栄堂
株式会社 ミキモト
三井住友海上火災保険 株式会社
株式会社 三井住友銀行
三井物産 株式会社
株式会社 三越
株式会社 ミロク情報サービス
森ビル 株式会社
株式会社 ワコールホールディングス

法人維持会員 (十一社)

(五十音順)

- 大阪ガス 株式会社
公益財団法人 五井平和財団
株式会社 再春館製薬所
株式会社 靖雅堂夏目美術店
宗教法人 全昌院
株式会社 ダイクレ
大和建設 株式会社
辻調理師専門学校
株式会社 なとり
公益財団法人 東日本鉄道文化財団
株式会社 横井春風洞

お願い

○賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い
当財団では、財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。

- 法人正会員 年額(1口) 50万円
個人正会員 年額(1口) 1万円
維持会員 年額(1口) 10万円

財団案内および賛助会員入会申込書のご請求、その他お問い合わせは財団事務局にご連絡下さい。

○アフガニスタン文化財復興支援募金と流出文化財(文化財難民)一時保護

当財団は、アフガニスタンの文化財復興を支援するために募金を行っております。募金は郵便振替(00160-5-12319(公財)文化財保護・芸術研究助成財団)並びに財団宛の現金書留で受付けております。郵便振替と現金書留には「アフガン募金」と記載してください。お問い合わせは、財団事務局まで。

編集後記

文化を通じた平和活動を実践されてこられた故平山郁夫理事長。「世界の文化は、幾重にもさまざまに折り重なつていくなかである。例えば、飛行機が何かで、突然、中東のイラクやイランに降ろされたこと。今の私たちに、とても異なる文化であり、全く異なる習慣を持っているように感じられます。しかし、人類の文化はつながり合っているのだという認識でみると、どこか共通の血が流れているような、あるいは文化の質というものが感じられる。それが、その国に対して尊敬と親しみを覚えさせてくれるのです」と時々語っておられました。人種・宗教・国境を越えることのできる文化こそ、人類の相互理解を通じて平和の構築の礎になるとの信念がそこに感じられます。平山理事長亡き後も、その志を皆様とともに職員同引き継いでいきたいと思っております。今後とも引き続き、御支援・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

今月の表紙

平山郁夫画伯の院展初入選作である。この後自分は何を描くべきかと画伯は悩み、摸索の時代へと入る。加うるに被爆後遺症による病魂との闘い。「家路」発表から雌伏五年、「仏教伝来」によって活路を見出した画伯は勇躍世界に羽撃いてゆく。後に母校にあたる東京芸術大学の学長、日本美術院理事長となる画伯にとって、本作品はすべてのスタートとなった記念碑かもしれない。二十三歳だった若き画家は本作品にどんな思いを託していたのだろうか。



広報紙「絲綢之路」(シルクロード)

二〇一〇年 夏号 通巻第六十三号

★平成二十二年六月十五日発行

★編集発行/公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 事務局◎

〒110-0007 東京都台東区上野公園十一-150

電話(03)5685-1111

FAX(03)5685-1111

URL:http://www.bunkazai.or.jp/

E-mail:imkkyoku@bunkazai.or.jp

★印刷 株式会社 東都工芸印刷